

JIA news kinki

# 翔

syo

no.106/2008

春号



表紙写真：「無題」益田 治子  
「旧小西家住宅(重要文化財)にて展示」



## 表紙解説 - 「無題」

---

木の葉が揺れて すれる音

頬を撫でる 穏やかな風

静けさの中に 見え隠れする躍動感

## CONTENTS

### 連載

---

- |              |              |
|--------------|--------------|
| 「和のこころ」      | 吉村美枝         |
| 「JIAデザイントーク」 | 柴山直子<br>橋本雅史 |
| 「建築家の視点」     | 橋本健治         |
| 「都市点描」       | 高木 明         |
| 「住宅部会通信2007」 | 中西重裕<br>矢代 恵 |

### 情報

---

#### 新入会員紹介

## もっと「国産」の暮らしをしてみませんか？

吉村美枝

(文字造形作家)  
(インテリアプランナー)

数年前にパリを訪れたときのこと、バスティーユあたりの家具屋さん通りを歩いていると、やたら「日本」を意識したディスプレイが目につきました。「畳」の文字がデカデカと書かれたショウウィンドウを覗くと、まさに畳が一枚置かれて、その横に障子らしきものが立てかけられていました。可変性のある座式の暮らし方の良さは、外国でもちょっとした話題になって久しいですが、畳や障子を単なる「珍しいインテリアエレメント」としてとらえているだけなのかもしれません。自然と共存して暮らす日本の気候風土とはおよそ違う環境で生活するヨーロッパの人々にとって、畳や障子本来の良さが解からないのはしかたのないことなのでしょう。

また、街のあちこちで漢字をデザインモチーフにしたTシャツや、インテリアファブリックをみかけましたが、日頃、「文字」にちなんだ鉄やガラスの作品を制作している私にとっては首をかしげるもののように思います。単にロゴマークとしての面白さをねらっただけの「漢字」であり、その意味やそこから膨らむイメージなどを彼らの感性に求めるのは無理な話なのかもしれません。

歳を重ねて還暦も過ぎましたが、最近になってもっともっと「日本」を知って、存分に愉しみたいと思うようになり、昔、習っていたお茶のお稽古も、また始めました。大阪の中央区に、日本に古くから伝わる五節句の室礼をきちんと飾りつけて見せてくださる船場の商家があります。季節ごとの節句飾りの由来や歴史的な意味の説明をしていただくたびに、日本に生まれて長らく(?)住んでいながら、なんと知らないことの多いことか!と恥じ入るこの頃です。お正月に始まり、桃の節句、端午の節句、七夕、重陽の節句・・・と続くのですが、しっかりと意味を理解して、楽しみながら子や孫に伝えていくべきではないかをつくづく感じます。たとえば、薬玉(くすだま)のことを例にとっても、湿度の高い日本の夏を健康にのりきるために、薬草を包んだ袋をむすびつけたものがその由来で、五月五日から九月九日までの間、部屋に吊っておき、その後は廃棄するのだそうです。私たちがよく目にする華やかな丸いものは単に飾り物として今に残っていますが、薬玉にも「真・行・草」があり、その丸いものは「草」のものだそうです。医学の発達が進んでいない頃の、暮らしの知恵だったのですね。



作品名「虹」 吉村美枝 作



作品名「集」 吉村美枝 作

# 和のこころ

このごろのように陽気がよくなってくると、部屋の中をすっきりとさせたいくなります。写真(1)の壁に掛かっている作品(愚作です)は、墨で書いたものではありませんが、イタリアモダンの白い家具になんの違和感もなく、空間の構成に役立っていると思います。

「和」の作品というよりは現代アートのようにもあり、「和」と「洋」のコラボとしてはおもしろいのではないのでしょうか。

心地よい空間は、知らず知らずに我々の五感にいい刺激を与えてくれます。絵を眺めながら(視)、好きなジャズを聴き(聴)、居心地の良いソファに身をゆだね(触)、コーヒーを飲む(味)・・・ただ、香り(嗅)に関しては、比較のないがしろにされているのではないのでしょうか。

鼻という器官がほかの器官よりは鈍感(原始的?)で、臭いものでも慣れてしまうと割りと平気、という話を耳鼻科の先生から聞いたことがあります。「臭いものに蓋」式の消臭ではなく、もっと積極的に香りの世界を楽しんでみてはいかがでしょうか。

最近では、アロマテラピーなどがはやったり、ホテルのラグジュアリーなスイートルームのフロアにアメニティを高めるためと称して、かなり濃厚な香りが使われたりしています。それよりも、押し付けがましくない、日本古来の香りをおすすめします。茶道や華道にくらべて親しみの少ない香道ではありますが、室町時代からつづく組香という香遊びはなかなか優雅なものです。なかでも「源氏香」という組香は、その香の図のデザインが、現在でも着物や帯、掛け軸の切れ地、欄間などに用いられることも多く、目にされたこともあるとおもいます。(写真2・3)香炉に焚かれたお香を聞いて、同じ香りを結んだものが香の図になり、その種類は源氏五十四帖にちなんでいる、という雅びな遊びです。日常的には、線香型のお香を簡単な香立てにたてて(写真4)、お部屋香として愉しまれてはいかがでしょうか。お香には、神経を休める効果もあるとか。実際に渋滞に巻き込まれた車のなかで、お香の効果が実験で実証された、という記事を目にしたことがあります。来客のある少し前にお香を焚くことで、住まう人の心使いが偲ばれることでしょうか。今は香りの種類も数十種もあり、昔ながらの沈香のほか、フローラル系、フィトンチッドなどのような森林浴系もあり、そのときの気分次第で気軽に愉しめるものです。

食品などをはじめ、輸入に頼りきっている日本の生活のなかで、買ったものに「国産」と表記されているとほっと安心するようになってしまいましたね。この際、暮らし方も「国産」に戻してみませんか。きっと、なつかしい、やすらぎが得られるかもしれません。



写真1



写真2



写真3



写真4

# 「JIAデザイントーク」

2007年度 第4回デザイントーク

開催日：2008年1月28日(月)

コメンテーター：本多友常、山本光良、吉村篤一

司会：青砥聖逸

発表者：柴山直子、橋本雅史

会場：大阪市中央公会堂地下大会議室

柴山直子氏（柴山建築研究所）

発表作品 / 五個荘金堂伝建地区の町並み保存（滋賀県東近江市）

## 東近江市五個荘金堂伝建地区の状況

平成10年12月25日、50番目に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された五個荘金堂地区は、元禄6年（1693）に大和郡山藩の金堂陣屋が置かれ、その三方に弘誓寺、浄栄寺、勝徳寺の3寺院を配置し、周辺に草葺き屋根の農家住宅が広がる集落構成の基礎ができたと考えられている。

この地区より、江戸時代後期から昭和前期にかけて近江商人が多く輩出し、京都・大坂・江戸等に出店を持った彼らは、郷里を離れることなく、集落に意匠を凝らした本宅を構えた。また、彼らの財力は、大規模な社寺建築にも見るべき建造物を遺している。そして、商人本宅、伝統的な農家住宅があり、さらにその周囲に条理制地割の水田景観が広がり、これらが一体となって特徴ある優れた歴史的景観となっている。



## 町並み相談員の役割

筆者は、選定後の平成11年8月より、当地区で町並み相談員の業務を受けている。旧五個荘町では、建築系の職員がいなかったため、選定に係わった保存審議会の学識経験者の発案で、外部から人智を確保することとなったようである。業務内容は、外観の現状変更に伴う相談業務、申請書の確認などの日常的な業務から、国庫補助事業に伴う建物調査、設計図・修理方針の作成、所有者との協議、概算見積書の作成などの業務を行っている。



伝建事業は、保存修理事業が主で、外観保存と外観を維持するための構造補強を中心としているが、耐震については高い関心事ではなかった。昨今、古い木造建築物の耐震補強についても看過できず、東近江市では、平成18年度より、審議会の中に耐震化小委員会（会長：鈴木有金沢工業大学名誉教授）を設置し、専門家の指導のもと、耐震補強に取り組んできている。



地区には、NPO法人金堂まちなみ保存会があり、町並み保存は、地元住民と行政の円滑な連携が必要とされている。このような中、地域の建築士が果たす役割は単なる技術だけではないように感じている。



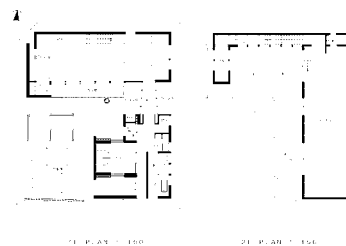
橋本雅史氏（キューブ建築研究所）

発表作品 / 秋月の家(和歌山市秋月) / 内原の家(和歌山市内原)

秋月の家

建設場所：和歌山市秋月	外部仕上げ	内部仕上げ
構造：木造平屋	外壁：ガルバリウム鋼板	床：コンクリート直押さえ
敷地面積：295.49㎡	屋根：ガルバリウム鋼板	壁：ラワン合板AEP
床面積：80.53㎡	開口部：アルミサッシュ	天井：PB AEP

脊椎損傷を持った人の住宅です。安全を配慮するため平面図と内部の写真は掲載していない事をご了承願います。安全とセキュリティが第一に求められた住宅です。室内温度の変化が体調に著しく影響するため室内に直接光が入る事が制限されました。その為開口部は北側からの基準法を満たす最小限としました。事例が希少な事もあり、バリアフリーの一般論は目を通すだけに止まり、デディールについてはインタビューを参考に決めてゆきました。現在は一時的に帰宅が許可され、本格的な生活はまだですが、手探りの状況の中、クライアントが住まいながら共に考えてゆく事にしています。



内原の家

建設場所：和歌山市内原	外部仕上げ
構造：木造2階建	外壁：杉板貼り
敷地面積：233.74㎡	屋根：ガルバリウム鋼板
延べ床面積：154.95㎡	開口部：木製建具、アルミサッシュ
1階床面積：94.09㎡	内部仕上げ
2階床面積：60.86㎡	床：杉圧密 壁：しっくい塗り
	天井：PB AEP

和歌山市の南、海に程近い閑静な住宅地に建つ、設計者 家族4人の住宅です。昭和40年代前半、この周辺は宅地化され始めました。しかし当該敷地は畑のまま放置され周囲の宅地化に取り残された感がありました。敷地は私道と和歌山市道との角地にあり、市道は道路幅員約4mで周辺に住む方が利用する程度です。

今回、設計に当たって、既に立ち並んでいる周辺建物などの環境に配慮する事と自然エネルギーを活用した環境負荷の小さい建物とすることを考えました。そもそもこの和歌山市は日照時間が全国的にも比較的長く、紀南地方に比べると雨や台風の影響も少なく、気候にも恵まれ、そして静かな住宅地ということもあり、内と外の連続性を保ちつつ外部に開かれた住宅を考えました。まず敷地全体を周辺の建物高さまで立上げ、空・緑といった自然のエレメントを挿入し建物の形態を構成させています。また、視線の抜けを有効的に考え、空間のつながりや広がりやを緩やかに連続させました。アプローチについては軒高さを低く抑え、街に対して威圧感をなくす事



と程よい緊張感を持ちながら中庭に臨むこととしています。リビングから中庭にかけては縁側を緩衝帯とし、内と外を緩やかに連続させました。このリビングには「縁側」のどこからも出入りすることができます。この開放感と対極に室内北側は土壁下地の漆喰塗りとし調湿という機能上の効果と「浄化、清い」といった精神性を併せ持ち、住む人に安心感を与える壁としました。吹き抜け上部には窓を設け、冬季は温まった空気を、夏季は新鮮空気を送風パイプにより床下に送り、空気を循環させ、室内環境を向上させています。リビング上部の開口部によって緩やかに繋がっている2階プライベート空間も家具をインフィルとし、将来の家族の変化にも対応できるように配慮しました。



#### コメンテーター総評コメント

柴山直子さんの発表について

近江商人が活躍した時代の面影を残すまちなみを保存しつつ、耐震補強や維持管理にかかわることは、住民との対話を前提としなくては成り立たず、地道な参画の様子がひしひしと伝わってきた。これは建築家が意を注ぐべき大切な側面であり、その意義を社会に認知してもらえる活動は、優れたデザイン行為であると言える。

橋本雅史さんの発表について

視線の抜けを意識した内部空間の連続性は、中庭を囲むことによりさまざまな表情が生まれている。将来の家族のライフステージに合わせ、使い方を变化させることを前提とした間取り構成は、内部空間の連続性を担保するものであり、背景を構成する漆喰塗りの壁がこれをしっかりと受け止めている。（本多友常）

100年以上生き延びた民家は、貴重な社会的財産です。同時に生きた建築とするためには、これからも使われなければならない。歴史的建築を生きた建築とするために、これからのライフスタイルと共生した、新旧の新しいデザインの組み合わせの積極的な提案が求められます。（山本光良）

建築家は、これまでのように単に新しい建築を設計するだけでなく、町並み保存や古い建築の修復や再生などに携わることも職能の一環とらえていく必要がある。そういった意味で、今回は橋本雅史氏の住宅作品と、滋賀県東近江市五個荘金堂伝建地区の町並み相談員として、当地区の町並み保存に携わっておられる柴山直子氏に、その業務と役割について発表していただき、その成果を確認することができた。これからも、年に1度はこのような機会があればよいのではないかと考えている。（吉村篤一）

## 国民の遺産が尊重されない

- 郵政事業と国土防衛の残照から

橋本健治  
(意匠人設計房)



この国の近代建造物も成し遂げた人々からの遺産である。いわば国民の共有財産なのであるが、私たちの現代が近代を尊重せず、一時の手前勝手な都合で処分しようとしたり、今なお放棄している事実がある。それらは次代に向け確実に受け渡されるべき財産なのである。最近の事例から対照的な二つの公共的建造物の問題状況を考えたい。

H16～18年度(2004～2007)3カ年間『大阪府近代化遺産(建造物等)総合調査』に参画し、建築物だけでなく土木施設にも等しく関心を持つ機会を得た。取上げた二つの建造物はいずれもわが国の近代化に関わった建築と土木の重要な遺産である。

一つは通信という郵便・電信の基幹産業を体言する『大阪中央郵便局庁舎』(S14年築・DOCOMOMOJapan100選/関西のEタ'ニズム建築20選)、一つは国土防衛の要塞という軍需産業を体言する『友ヶ島砲台群』(M20年代築・2003年土木学会推奨土木遺産)であり、一方は著名建築家・吉田鉄郎らによる都市的建築物、他方は名も知れぬ土木技師らによる離島の掩蔽構造物だが、いずれも創建当時の優れた設計・技術・材料・施工の創意が結集されている。

### 大阪中央郵便局庁舎の建替え問題

大阪駅とその周縁が建設工事で騒然としている中、その西南側一画に際立って存在感を増しつつある中郵庁舎が、東京中郵庁舎と同様、郵政民営化による新会社にとって恰好の不動産建替え事業の対象にされている。この事態に2005年夏頃より、東京大阪両中郵庁舎(図1・2)保存活用の要望が、国-公社-新会社に対し繰り返し提出され、パブリックコメント公募、緊急シンポジウム開催(図3)、有識者の検討委員会、設計者の公募選定、東京での重文指定をめざす国会議員に続く市民行動の中、事業決定のタイムリミットが迫る。

この建替え開発志向の根底には、「都市再生特別措置法」に基づき容積率を上乘せする優遇誘導があり、対象地域内の相互関係や需要実態を伴わない増床競争はパブルの再現を招き、行き着く先は負の遺産に成りかねない。優れた財産の滅失建替えの結果ではなおさらである。民営化によって国民に支払われるべき対価、建物解体による逸失利益、建替え投資によって生じうる危険負担などが正等に事業検討に算定評価されなければいけない。



図1



図2



図3



既存建物は当初の集配施設用途の設計水準、各階中央の光庭、 $180^\circ$ 階高に余裕ある架構など現有諸性能からしても転用などの活用性は充分備わっており、大阪駅前で最高齢69歳ながら現役澁刺まだまだ働ける筈である。日本近代建築史にとっても、戦時統制で建設が減じる前の数少ない貴重な生き残りで、建物前を通るたびに嬉しくなる程に逞しい存在だ。

大阪駅前の都市空間にとって貴重な上空の高容積分は、東京駅の保存復原費用が容積転移で賄われたように、隣接～近隣で必要な建物容積として活用してもらえればよい。

西梅田界限では地下街を歩かず、地上でこの建築の存在価値を改めてじっくり確かめていただきたいものだ。

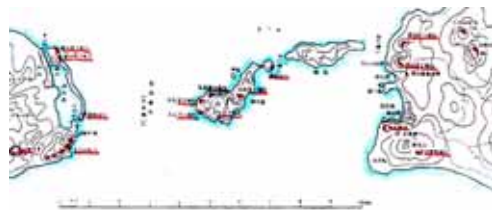


図5

### 友ヶ島砲台群の現状問題

和歌山の友ヶ島地区・加太深山地区は、淡路島の由良地区（鳴門地区後年編入）と共に、太平洋との往来路・大阪湾の咽喉部を防御するため、幕末期に整備された大砲台場（図4）が明治中期に再築近代化され、『要塞地帯法』M32年制定による『由良要塞』区域（図5）を構成していたが、戦後になって軍機保持の彼方から全貌が出現した。

これら要塞址の一般建築物とは異なる重厚な煉瓦造空間に憧れて、この3月末の出航日和を捉えて友ヶ島に渡る。船付棧橋の無神経な音響騒音に辟易としつつ、ひっそり残る煉瓦造廃屋を経て、紀淡海峡と対峙する海岸低地の第2砲台、灯台（M5年築）に隣接する高地の第1砲台、さらに登坂30分先の山上にある大規模な第3砲台を巡った。

各々砲台の露天部分と掩蔽ハックアップ部分は、各々地形に合わせて巧みに立体構造化され、離島の難工事条件にも関わらず、掩蔽空間（弾薬・火薬庫）は見事なヴォールト状煉瓦積構造（図6）で、半艶低吸水率で陶管表面のような高品質煉瓦（図7）が大量に使用され、埋込み角型排水陶管（図8）、開口部や階段の花崗岩使用など各部詳細に優れ、鋼板35ミリ厚円形加工の装甲観測所（図9）は貴重な遺構である。

第2砲台北翼側が終戦時に爆破され波濤を受けたままの崩壊放置（図10）、壕と室内のゴミ堆積、第1砲台で階段崩れ植物繁茂、第3砲台の砲座跡水溜まり（図11）、管理施設の廃屋進行など、放置同然の状況に対して、保存修復と活用整備を施せば、国土防衛遺構の存在も価値はより高まる。

非日常空間への探訪は日常に目を開かせ刺激的である。



図6



図7



図4



図9



図8



図10



図11

## 都心高層マンションと街並み・雑感

高木 明

(高木都市建築設計)



ここ数年、経済状況がはかばかしくない中であって、都心部に高層マンションがいくつか建設され都心居住が進められています。最近のマンションでの売残り戸数は増加しているとはいえ、都心居住の拡大はいくつかの点において好ましい状況であろうと思われます。特に、都心部に居住者がいると云うことはとりもなおさず、都心部での活性化につながるとともに社会資本の有効活用に果たす役割は大きいと言えます。

建築設計に携わる人々は、建築を考える場合、よく地域の環境や街並みを大切に、これらの条件を一層高めるように考えているとよく言われます。しかし、現状を見るとそうでしょうか。具体的に、その立地する街、街並みに対する配慮が少なく、都心部をどのように考え、それぞれのプロジェクトの中で、新たにどのような役割を果たそうとしているのか、はなはだ疑問であります。

しかし、これらの供給されるマンションは、比較的敷地が小さく、経済的理由を第一に、限られた条件の中で、最大の販売戸数の確保、住宅供給事業の利益追求が第一に考えられていると思われる点が多々あります。大阪の船場地域における高層マンションを見るにつけこれらの思いは高まるばかりです。都市再生や総合設計制度等の活用により、容積の割り増し、道路斜線制限の緩和等各種の一般規制が緩和されています。これに対し街並みへの配慮はもっと真剣に考えてしかるべきでしょう。このことは、建築家のみならず行政、市民等の連帯責任でもあります。

環境整備や公開空地の整備として豊かな緑空間が確保されている例がありますが、都市生活の場、街並みとしてみた場合、都心部としてこれだけでよいのでしょうか。入り口付近のシンボリックな緑とゴウジャスなイメージの玄関周り、周辺は緑豊かではあるが人々を排除する空間、裏に回ると味も素っ気もない駐車場の入り口、これらが多くのマンションの足回りの現状であり、郊外の住宅団地におけるものとどのように違っているのでしょうか。このような空間が都心部における建物・街並み環境とあってよいのでしょうか。

特に、船場地域には、昔の町、筋においては、それぞれ特徴を持った街並みが形成され、豊かな都市生活が営まれていたことは衆知の事実であります。現在の社会状況、経済状況の中で同様のものを形成・維持するのは困難ではありますが、都心部における都市生活の豊かさを高め、新たな都市生活を形成する何かを求めめる必要があるのではないのでしょうか。

具体的には、街並みと繋がる地下1階、1階、2階等の建物利用に関し、都心として居住者・従業者に限らない、多くの人々の利用に供し、魅力を感じる利便施設、アメニティ施設の積極的立地を考える必要があるのではないのでしょうか。神戸市で行われた例のごとく、これら街並みと繋がる部分の建築物の利用誘導を条例、地区計画等の街づくりの中で考えるのも一考かと思われます。経済的理由でこれら施設の設置が困難であれば、その設置状況に応じた建築容積の緩和、固定資産税の減免等誘導策等はこれまでの都市計画の中で多くの手法が利用されてきています。

このように都市景観の形成の場でこれまでも多く議論され、指摘されてきましたが最近の船場のこのような状況は、都市景観議論がまだまだ議論だけで終わっているといえます。都市景観形成に関わる法律も整備されてはいるもののその利用、運用を実質的なものとする必要があります。建築行為に大きく関わっておられる皆様方は如何に思われますか。



一般的な市街地の街並み



街並みとかけ離れた  
駐車場エントランス



高層住宅の1階のカフェテリア



緑空間で遮断された  
高層マンションの足元



## 「宝蔵院書院」見学会

中西重裕

(一級建築士事務所K&Nアーキテクト)



担当世話人：志村公夫、中西重裕

11月例会は臨済宗大本山天竜寺の塔頭寺院のひとつ「宝蔵院」で行われた。

庭園は「都林泉名勝図会」にも掲載されている巨大な獅子岩を生かし嵐山を借景にした回遊式の庭園で紅葉に彩られていた。書院の建物は林民雄氏の所有になり大正8年に完成しており、約90年経過している。玄関から廊下、茶室、水屋、書院などの部屋の床や壁、天井、開口部それぞれの箇所で作られている材料や納まりや見せ方について志村氏から解説を聞き、興味深いものばかりであった。

例えば廊下に用いられている網代もふんだんに使われ、階段の高低差にあわせて曲面に組まれているものもある。奥の書院は高床になっており、廊下から数段の階段を上がる。畳廊下に至り、6畳と12畳の続き間があり、そこから畳の縁側を通して窓に迫る庭のすばらしさは格別のものではあった。

庭園内の茶室「青嶂軒」では6畳の立礼席の茶室にある、明かりとり杉皮が用いられ、そこから入る外光が赤く染まって見える。杉皮が光を通すことや幻想的な色彩が生まれることを知ることができた。

もう一つの茶室「無畏庵」の開放された座敷でいただいた抹茶もおいしく、恵まれた天候とすばらしい建物と庭園、書院でうかがった安井先生の建築の真髄に迫る含蓄のあるお話は、嵐山の紅葉とともにすばらしい秋の思い出となった。



外観



廊下に設けられた地窓から光と風が入る



広間から庭方向を見る



茶室待合の開口部に貼られた紅く染まった杉板を見る

## 「人と未来と環境」 ～自然エネルギーで未来を拓く～

矢代 恵

(MEG 建築設計事務所)



講師 / 柴田政明氏(㈱エイワット代表)  
日時 / 2008年1月23日 18時～20時  
場所 / 大光電機㈱ショールーム 参加人数 / 28人  
担当世話人 : 古久保泰男、矢代恵

1月例会は「人と未来と環境」をテーマに講師に柴田政明氏をお迎えし講演をしていただきました。環境問題が深刻化している現代社会の中で、次世代につなげる建築のあり方や考え方の潮流を探る今回の企画は、最初に1時間DVD鑑賞のあと柴田氏の講演の構成で進められました。

DVDでは米国ニューメキシコ州近くにある自然循環型建築「earthship」の実例が紹介されました。Earthship Communityとして自然エネルギーだけを使った住宅やラジオ局などの建築、エネルギー活用システムやそこで暮らす人々の生活の様子が紹介され、わかりやすく興味深いもので、学校やTVなど広く一般の人にも見ていただく機会があれば良いと感じました。

後半の講演では、柴田氏が取り組まれた、地域とのコラボレーション事業による保育園への自然エネルギー機器を導入と環境教育、コンサートイベントでの自然エネルギー発電実施による環境啓蒙事業、海外支援活動など多くの国内外の自然エネルギー事業の実例紹介を通して、地球と共存する自然エネルギーを利用した未来社会について「次世代の建築デザイン」を考える機会となりました。

参加者は非常に熱心で関心の高さを実感し、「このような講演をもっとするべきだ」「このような講演が行われているのならもっと早くJIA活動に参加すれば良かった」との声も聞かれ、広くこのようなテーマの講演をしていく必要性を感じます。

今回の参加者は部会員以外が約半数を占め、講演会後の懇親会にも多く参加され講師を囲んで自然エネルギーの話も盛り上がり、また部会以外の人とも良い情報交換・交流の機会となりました。



多くの参加者が集まり、西濱部会長が住宅部会の活動も紹介



DVDを使って柴田氏講演スタート



今まで取り組まれた事業事例を具体的に紹介



講演で紹介された自然循環型建築「earthship」  
(earthship hpより転載)



## 新入会員紹介

---

京都府	魚谷 繁礼	魚谷繁礼建築研究所
兵庫県	大氏 正嗣	(株)デザイン・構造研究所
大阪府	木村 貞基	(株)アルファ建築設計事務所
大阪府	近藤 英夫	(有)近藤英夫建築研究所
大阪府	松本 明	松本明建築研究所

## 広報委員会

---

委員長	一尾晋示(大阪)
副委員長	木戸口浩之(京都)
委員	井上 守(大阪) 大江一夫(兵庫) 太田恭司(大阪) 木戸口浩之(京都) 小池啓夫(大阪) 小南一郎(大阪) 佐藤洋司(大阪) 澤村昌彦(大阪) 佐々木純一(大阪) 柴田敬四郎(奈良) 内藤 正(滋賀) 橋本雅史(和歌山) 森崎輝行(兵庫) 横関正人(大阪)
事務局	穴井宏樹 木田明生 緒方英輔
発行日	2008年5月20日(春号)
発行人	吉羽逸郎
発行	社団法人 日本建築家協会近畿支部 〒541-0051 大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館 TEL06-6229-3371 FAX06-6229-3374 ホームページ <a href="http://www.jia.or.jp/kinki">http://www.jia.or.jp/kinki</a> メールアドレス <a href="mailto:jia@bc.wakwak.com">jia@bc.wakwak.com</a>

表紙 「無題」 益田治子 「旧小西家住宅(重要文化財)」